



Title	分離事象の語彙カテゴリー化と言語化に関する実験認知言語学研究－意味論・構文論・類型論的観点から－
Author(s)	王, 鈺
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/103111">https://doi.org/10.18910/103111</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 論文内容の要旨

氏名(王鉢)	
論文題名	分離事象の語彙カテゴリー化と言語化に関する実験認知言語学研究 —意味論・構文論・類型論的観点から—
論文内容の要旨	
<p>主体が対象に力を加えることでモノ全体を分断・分離するという「分離事象 (Separation Events)」は日常生活の中でよく見かける出来事である。分離事象では、物理的世界における様々な関係が絡み合っている。これらの関係は、人間の感覚・知覚的認知メカニズムと深く関与している。現代日本語では、以下のような表現がある。</p> <p>(1) a. 太郎は野菜を細かく小さく薄く切った。 b. 太郎は割り箸を綺麗に真っ二つに割った。</p> <p>(2) a. 太郎は木の邪魔な枝を切った。/太郎は木から邪魔な枝を切った。 b. 太郎はボトルの栓を抜いた。/太郎はボトルから栓を抜いた。</p> <p>(1) は、対象の使役的な状態変化事象を表すのに対し、(2) は「カラ」格または「ノ」格によって移動の起点を表すことで、状態変化と位置変化を統合する複合的事象を表す。本研究では、(1) の分断・破壊事象と(2) の分離事象の区別に基づいて、「分離事象」を以下のように定義する。</p> <p>(3) 分離事象とは、動作主体が、対象に力を加えることで、対象の一部を分離させる事象である。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>i. 分離事象には、動作主、分離元、分離物という3つのパラメータが存在する。形式的に「Z(動作主) が X(分離元) から/の Y(分離物) を V(分離動詞)」として記述することができる。</li> <li>ii. 分離事象は、分離元の状態変化と分離物の位置変化を統合した複合事象である。意味的に、Zの使役動作によって、Xの状態変化とYの位置変化が生じると記述できる。</li> <li>iii. 分離事象における3つのパラメータには、互いに異なる力的関係のパターンが関与する。</li> </ul> <p>本研究は、理論と実証の両面を重要視する「実験認知言語学研究」の観点から、分離動詞の意味・機能と分離事象の類型を考察し、日本語と他の言語の相違点と共通点を明らかにすることを目的とする。特に、認知言語学における意味論、構文論、類型論の3つの観点を統合することで、分離動詞と分離事象の全体像を総合的に明らかにする。具体的には、次の3つの課題に取り組む。</p> <p>課題1 「分離動詞の意味・機能とその意味構造の解明」 (第4章、第6章)      課題2 「分離動詞の意味体系と分離事象の位置付け」 (第5章、第6章)      課題3 「分離動詞と分離事象の類型の提案」 (第7章)</p> <p>本研究の構成は以下の通りである。</p> <p>第1章から第3章は第一部の「序論」である。第1章では、研究全体の構想と内容を紹介する章として、研究対象の定義、研究目的、そして研究意義について述べる。</p> <p>第2章は、認知意味論・構文論の観点から、分離動詞と分離事象に関わる言語現象が、先行研究においてどのように論じられてきたかを確認し、先行研究の問題点とそれに関わる課題を指摘する。2.1節で、日本語の分離動詞に関する先行研究を概観し、これまでに明らかにされた分離動詞の特徴と性質を考察して、残された課題と分析の焦点を明確にする。2.2節は、分離動詞の多義性と交替現象との関係、格体制の交替を起こす動詞の条件と原理、状態変化と位置変化の下位類型を紹介する。2.3節は、先行研究の問題点と本研究の立場について述べた上で、分離事象の</p>	

性質を統一・全面的に説明する、新たな理論的枠組みを採用する必要性を示す。

第3章は、理論的背景を説明する章である。本研究が用いる主要な理論的枠組みであるTalmy (1985a, 2000a) の「力動性モデル (force-dynamics model)」、田中 (1990) による多義語の複層的意味空間、Talmy (2000b) の「マクロ・イベント (macro-event)」、そして手話言語学の理論的知見、特に手話言語の特有のCL表現について、4つの節に分けて紹介し、これらの理論的枠組みを採用した理由を述べている。

続いて、第4章から第7章は、第二部の「本論」である。

第4章は、「力動性モデル」を分離動詞に応用し、「切る」の意味構造分析を行う。4.1節では、「切る」を考察対象とする理由を説明する。典型的な多義動詞である「切る」は、位置変化を伴わない状態変化を表すこともできる一方、状態変化と位置変化を統合する分離事象を表すことができる。4.2節では、2つのカテゴリー観に基づいて「切る」の意味構造分析を行った先行研究を概観し、本研究の立場と意味構造の捉え方との違いを述べる。4.3節では、力動性モデルに基づいて、「切る」の各意味・機能を、パターン1「外的統合性」、パターン2「内的秩序性」、パターン3「物理的抵抗性」、パターン4「心理的抵抗性」という4つの意味パターンに基づいて分類し、それぞれの意味パターンにおける力的関係を明らかにする。また、「切る」の具体的な意味・機能、意味パターン（局所的スキーマ）、スーパー・スキーマを3つの意味レベルに位置付け、複層的意味構造を解明する。4.4節は、類似性判断テストと意味素性評定テストを用いて、理論的分析の結果を検証し、「切る」の意味構造を検討する。4.5節は、「切る」と類義関係にある分断・破壊動詞「割る」、「裂く・割く」との関係について検討し、日本語母語話者と中国人日本語学習者による動詞の使用状況を比較し、それぞれの使い分け基準を明らかにする。最後に、4.6節は第4章の総括として、「切る」の意味構造と分断・破壊事象における位置付けを明確にしている。

第5章は、現代日本語には「状態変化型分離動詞」と「位置変化型分離動詞」という2種類の分離動詞が存在するという仮説を提案する。5.1節は、分離事象構文の意味と形式を述べている。5.2節では、壁塗り交替現象とそれにに基づく本研究の仮説を示す。5.3節は、分離事象における分離元と分離物の物理的空間関係を「表面一付着物」、「容器一中身」、「全体一部分」という3つのタイプに分けた上で、コーパス調査を通して、2種類の分離動詞における空間的関係のタイプの割合を示す。「状態変化型」は、分離元と分離物が本来的に一体化する「物理的一体性」を持つのに対し、「位置変化型」は、分離元と分離物が本来的に一体化しない「主観的/機能的一体性」を持つということを主張している。それに加え、力動性モデルを用いて、2種類の一体性による力的関係の違いを明確にしている。5.4節は、分離事象における状態変化と位置変化の関係づけを、時間的関係と論理的関係という2つの側面から分析し、2種類の分離事象の概念構造を提案している。5.5節は、単一経路制約とその代案である事象統合の観点から、分離事象構文の成立条件と原理を解明する。5.6節では、第5章の総括として、分離動詞と、「離脱型壁塗り交替動詞」、「破壊動詞（使役変化動詞）」、「使役移動動詞」という関連動詞類との比較の結果をまとめ、日本語における分離動詞の意味体系の全体像を記述する。

第6章は、中国語の分離動詞“V掉 (diao, 落ちる)”の意味構造を考察し、中国語と日本語の分離動詞を比較・対照する。6.1節は、分離動詞“V掉”を考察対象とする理由を述べる。6.2節は、本動詞“掉”と“V掉”的意味拡張に関するこれまでの共時的・通時的研究を概観し、その問題点を指摘する。6.3節は、日本語の分離動詞の分析に用いた力動性モデルを“V掉”的意味分析に応用し、“V掉”的各意味・機能を、パターン1「分離事象型」、パターン2「単純移動型」、パターン3「消滅事象型」、パターン4「完遂・極度型」という4つの意味パターンに分類する。パターン1「分離事象型」は中核的意味パターンであり、このパターンには、位置変化型分離事象と状態変化型分離事象という2種類の力動性モデルが存在することを明らかにする。位置変化型分離事象の力動性モデルに基づき、パターン1「分離事象型」からパターン2「単純移動型」へと意味が拡張している。その一方、状態変化型分離事象の力動性モデルに基づき、パターン1「分離事象型」からパターン3「消滅事象型」、パターン4「完遂・極度型」へと拡張している。それに加えて、パターン4は、パターン1からパターン3と文法化的程度が異なっており、アスペクト的な意味と特定の心的態度（消極的感情）を表すということを明らかにする。これらの分析を踏まえ、“V掉”的複層的意味構造を可視化している。6.4節では、中国語において、本動詞が下降移動を表す“V下 (xia, 降りる)”、“V落 (luo, 落ちる)”との比較を通して、意味的特徴の違いを考察する。分離動詞“V掉”では、力学的関係が動詞の意味構造において重要な役割を果たし、意味の概念化と文法化への影響を明らかにする。それに対し、“V下”、“V落”では、力学的関係に基づく意味拡張が見られないことを明らかにする。6.5節は、空間的関係と意味の文法化という2つの側面から、日本語の分離動詞との比較を行う。さらに、両言語における分離動詞の共通点に基づき、力学的関係と空間的関係の詳細を述べた上で、「力学動詞」という新たな動詞クラスを提案し、分離動詞を力学的関係に基づいて規定される「力学動詞」に位置付ける必要性を提示する。最後の6.6節は、第6章の内容を総括し、次章の類型論的研究を予告する。

第7章は、言語類型論の観点から、日本語、中国語、中国手話の母語話が分離事象をどのように認識してカテゴリー化するのかを考察する。特に、第4章から第6章の理論的考察の結果を基盤として、統一した実験的枠組みで、分離事象の特徴と類型を探究している。7.1節では、Talmy (1985b) の語彙化類型論から見た、日本語、中国語、中国手話の類型的特徴を説明し、7.2節では理論上の課題と方法論上の課題を述べ、次に先行研究を踏まえてビデオ発話実験を採用することを述べる。7.3節は、実験題材の設定、実験対象者、実験方法を含めた研究方法を、7.4節は、分析の観点と分析の手続きを含めた分析方法を説明している。7.5節は、実験結果に基づき、分離動詞の語彙レパートリー、分離事象の語彙カテゴリー化の基準、分離事象の認知プロセスという3つの観点から、日本語、中国語、中国手話における分離事象の類型的特徴を解明する。特に、これら3つの言語は、分離元と分離物の空間的関係という上位の語彙カテゴリー化の基準では共通する一方、下位の語彙カテゴリー化の基準に関しては多様な基準が存在し、大きな違いが相互に見られる。これによって、分離事象における言語間の共通性と多様性を明らかにする。7.6節は、分離事象の類型的特徴と性質に関する説明を行い、類型化のモデルを提案し、そして、分離事象の類型化から見た3つの言語の特徴をまとめると。

最後の第8章は第三部の【結論】に当たる。第8章は、研究全体のまとめと総括を行っている。本研究の知見、本研究が示唆する内容を提示し、理論的な面と記述的な面から本研究の独自性と意義を示して、今後の課題を述べる。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏名	(王 鈺)	
	(職)	氏名
論文審査担当者	主査	准教授
	副査	教授
	副査	教授
		小葉 哲哉
		田畠 智司
		大森 文子

### 論文審査の結果の要旨

王鈺氏の博士論文『分離事象の語彙カテゴリー化と言語化に関する実験認知言語学研究—意味論・構文論・類型論的観点から—』は、主体が対象に力を加えることでモノ全体を分断・分離するという「分離事象 (separation event)」を表す表現について、理論と実証の両面を重要視する「実験認知言語学研究」の観点から、分離動詞の意味・機能と分離事象の類型を考察し、日本語と他の言語の相違点と共通点を明らかにすることを目的としている。特に、認知言語学における意味論、構文論、類型論の3つの観点を統合することで、分離動詞と分離事象の全体像を総合的に明らかにすることを目指したものである。本論文は8章で構成されており、各章の概要は以下のとおりである。

第1章では、研究全体の構想と内容を紹介する章として、研究対象の定義、研究目的、研究意義について述べている。

第2章は、日本語の分離動詞に関する先行研究、および、分離動詞と関連する壁塗り交替動詞に関する研究を参照した上で、認知意味論・構文論の観点から、分離動詞の意味的特性、および状態変化と位置変化の下位類型と関連性について考察し、最後に先行研究の問題点と本研究の立場を述べている。

第3章は、Talmy(1985, 2000a)の「力動性モデル」(force-dynamics model)、田中(1990)による多義語の複層的意味空間、Talmy(2000b)の「マクロ・イベント」(macro-event)、手話言語学における分析方法といった、本論文が依って立つ理論的枠組みについて説明されている。

第4章は、Talmy (1985, 2000a) による力動性モデルから日本語の分離動詞の意味を分析する。まず、動詞「切る」の多義性に関する先行研究を概観した上で、「切る」が表す意味・機能を詳細に分析するためには、切るモノと切られるモノとの力的対抗関係を捉えることが重要であると主張し、力動性モデルに基づく分析を提案する。本章では、「切る」の15の個別義を「外的統合性」「内的秩序性」「物理的抵抗性」「心理的抵抗性」という4つの意味パターンに分類した上で、『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』を用いて各個別義の出現頻度、および共起名詞の意味タイプを具体的に明らかにするとともに、4つの意味パターンに対して力動性モデルから分析し、意味パターン間の共通性と拡張関係、および各意義との階層関係を3つのレベルから捉える提案を行っている。本章の後半では、上記のコーパス調査および力動性に基づく理論的分析に対して、類似性判断テストと意味素性評定テストといった心理実験を行って、その妥当性を検証している。クラスター分析の結果に基づき、「切る」の各用法に関する日本語母語話者のカテゴリー化を検証し、意味分析で提案した4つの意味パターンの心理的実在性が裏付けられることを示している。また、日本語学習者の結果とも比較した上で、日本語母語話者と日本語学習者のもつ意味構造の違いを考察する。そして、「切る」の類義語「割る」「裂く」の意味的な違いや使い分けの基準を、想起テストによる心理実験の成果に基づいて考察している。

第5章では、現代日本語の分離動詞を構文的観点から考察し、当該動詞類を「切る、ちぎる」のような「状態変化型分離動詞」と「抜く、落とす」のような「位置変化型分離動詞」の2種類に分類することを提案している。まず、「開ける」のような離脱型壁塗り交替動詞との比較から、分離動詞の意味的特徴を考察する。続いて、分離事象における分離元と分離物の物理的空間関係を、「表面一付着物」「容器一中身」「全体一部分」という3つのタイプに分類した上で、コーパス調査を通して、2種類の分離動詞それぞれが関わる空間的関係のタイプの割合を具体的な数値で示している。そして、状態変化型分離動詞と位置変化型分離動詞は、分離元と分離物の一体性に違いがあることを主張し、力動性モデルを用いて両者の力的関係を分析している。さらに、分離事象において、状態変化と位置変化の関係づけを、時間的関係と論理的関係の観点、および単一経路制約の観点から分析し、2種類の分離事象の概念構造を提案する。

第6章では、日本語の動詞「切る」に対応する中国語の分離動詞“V掉”(diao, 「落ちる」の意)の意味構造を考察し、中国語と日本語における分離動詞の比較対照を行っている。力動性モデルを“V掉”的意味分析に応用し、その意味機能を「分離事象型」「単純移動型」「消滅事象型」「完遂・極度型」の4つのパターンに分類した上で、それぞれの意味的関係を複層的な階層構造として分析している。また、空間的関係と意味の文法化という2つの側面から、日本語の分離動詞と比較を行っている。さらに、両言語の分離動詞の共通点に基づいて、力学的関係と空間的関係の詳細を明らかにすることで、力学的関係に基づいて規定される「力学動詞」という新たな動詞クラスを提案している。

第7章は、言語類型論の観点から、日本語、中国語、中国手話の母語話者が分離事象をどのように認識してカテゴリー化するのかを考察している。先行研究および第4章から第6章の考察の結果を踏まえ、ビデオ発話実験を実施し、各言語の分離動詞の語彙レパートリー、分離事象の語彙カテゴリー化の基準、分離事象の認知プロセスの特徴を考察し、これら3つの言語が、分離元と分離物の空間的関係という上位レベルの基準では共通する一方、下位レベルでは多様な基準が存在し、大きな差異が見られることを明らかにしている。

第8章は、本研究の成果を総括し、結論と残された課題について述べている。

以上のように、王鈺氏の博士論文は、「切る」のような分断・破壊という状態変化を表す動詞を「分離動詞」という観点から捉え直し、その多義性、構文的振る舞い、語彙カテゴリー化といったテーマを取り上げ、複数の言語の対照言語学的・言語類型論的考察を基盤として包括的に探究した労作である。特に、コーパスによる詳細な用例調査、Talmyの力動性モデルを用いた理論的分析、心理実験で得られたデータに基づく仮説の検証という一連のプロセスを日本語・中国語・中国手話という類型論的に異なる3つの言語を対象として展開したことで、本論文は、他に類を見ない考察の包括性、精度の高い意味分析、議論の実証性を誇るものとなっている。質的・量的アプローチの両方を取り入れた研究手法と複数言語を対象とした調査の実施から、筆者が本研究に膨大な時間と労力をかけ、真摯な態度で取り組んできたことがはっきりとうかがえる。

本論文の特筆すべき貢献として、まず「切る」の多義性分析において、「木を切る」「トランプを切る」「啖呵を切る」のような全く異なる用法を一貫した基準で分類・整理し、主動体と対抗体の力的関係に基づいて精緻な意味分析を行っている点、また、その分析を中国語における対応表現“V掉”に応用し、日本語と中国語の共通点と相違点を明らかにしている点、さらに、Talmy (1985, 2000a, b) の力動性モデルを援用し、「表面-付着物」「容器-中身」「全体-部分」のように、対象と背景に見られる空間的関係のありようが分離動詞によって大きく異なることを詳細に明らかにした点、そして、言語によってその語彙カテゴリー化に興味深い差異が生じることをコーパス調査や心理実験に基づいて実証的に明らかにした点が挙げられる。これらは近年活発に行われている状態変化事象の類型論的研究に、新たな知見を提供するものであり、高い学術的価値を有すると評価できる。

さらに、中国手話を考察対象に含め、言語類型論的分析およびビデオ発話実験による語彙カテゴリー化の検証を行った点も重要な成果である。従来の語彙カテゴリー化の研究では、英語をはじめとするヨーロッパ諸言語や、日本語、中国語といった音声言語を中心とした研究が主流であった中で、手話言語である中国手話を取り上げ、力動性モデルという共通の分析的枠組みに基づいて検証を行ったことは、当該研究分野において新たな視座を提示する意義深い取り組みと評価できる。

一方で、審査では、「カードを切る」のような混合義の用法がカード類のような体系性のある対象に限定され、「マヨネーズを混ぜる」のような他の混合事象には「切る」が使用できないことから、本論で提案されたスキーマおよびネットワークに基づく多義構造には改善の余地があるとの指摘がなされた。また、「切れる」のような自動詞用法についても、「頭が切れる」「息が切れる」のように他動詞とは異なる意味拡張が見られる点や、「木から枝を切る/\*木から枝が切れる」のように構文的な振る舞いも異なる点が指摘され、本論の分析がこうした自動詞用法に応用可能かどうかが問われた。さらに、「切る」「割る」「裂く」の類義性に関して、「2人の仲を{割る/切る/裂く}」や「人数の7割を{切る/割る}」における意味の違いをどう捉えるのかといった問題も提示され、同様のミニマル・ペアで比較することで、本論での観察と異なる結果になる可能性についても指摘された。

しかしながら、これらの指摘は本研究の発展的課題として位置づけられるものである。本論文は、質的・量的研究手法を駆使し、日本語・中国語・中国手話の分離動詞を意味論・構文論・類型論の観点から複眼的・包括的に考察することで、その多義性・構文的特性・語彙カテゴリー化の実態を実証的に明らかにした。これにより、認知言語学的な多義性研究・構文研究・語彙カテゴリー化研究において意義ある貢献を果たしていることは疑いない。

以上のことから、本論文を博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。